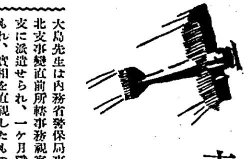


支那事變と大國民の襟度

大島弘夫

大島先生は內務省警保局事務官、北支事變直前所轄事務視察の爲北支に派遣せられ、一ヶ月戰火に埋もれ、實相を直視したものである本文はその感想。

七月七日蘆溝橋に於ける支那兵の不法射擊に端を發した事件は日本中央政府及出先機關の事件不擴大の努力にも不拘、一路反對へ反對へと其の方向を辿り、遂に今日の如き日支全面的衝突の狀態を招來するに至つた。

私は恰度蘆溝橋事件勃發の直後北支視察の機會を得て、現地の空氣なり狀況を親しく見聞することを得、其の間皇軍將士の忠烈なる奮戰や在留邦人の多大の銃後活動を眼のあたりに見、或は通州事件天津事件を見、誠に得難き經驗を得たが、一々詳細は紙面の都合により之を他日に讓り、今回は其の間時に得た感想の一、二を申上げ考察し度いと思ふ。

七月十一日所謂三ヶ條の現地協定が成立してより二十八日の北平附近の總攻擊に至る迄、現地に於てはこの現地協定を基礎として和平解決に對し並々ならぬ苦心努力が拂はれたのであつた。一部にはかくの如き不擴大方針は徒に支那側を增長せしめ日本は遂に北支を放棄するか、さもなくば再び第二第三の蘆溝橋事件勃發し、より大いなる犧牲が我國に要求せらるゝであらうとの見解から不平の聲すら起つて居たのであるが、出先機關は最後迄和平の努力を續けられた樣に見受けられたのである。

支那側に於ても日本の實力を知悉せる一部政客は事端の容易ならざると日本の決意の強固なるを知り、極力和平解決に努力したのであるが、氣負ひ立つた一部政客、學生及二十九軍將士の抗日意識は事每に事端を困難に導き、終に最惡の事態に突き進んだのである。

○　○

今回の事件は成程其の發端は支那兵の不法射擊に過ぎないのである。しかしこの事件の背景ともいふべき當時の客觀的狀勢は之を仔細に觀察してみるならば問題の本質は極めて深刻且困難であつて、一時の行違ひと簡單に片付け去るを得ないのであつた。昨年以來日本が國內諸狀勢により對外的に國內不統一の印象を與へ、又事實對支關係に於ても幾多の不利な立場に立ち（二、二六事件、成都北海事件と之に伴ふ南京交涉綏遠事件、協和外交等々）支那に對して日本組み易しとの感を與へた事は拒み難い事實であり、一方南京政府は國內統一の時流に乘つて着々と順調なる步みを續け、一時將政權も沒落かと思はしめた西安事件の如きも却つて南京政府の統一の基礎が侮るべからざる程度になりをることを示し、南京政府をして自己の力に自信を懷かしむる結果になり、勢を驅つて南京政府は全力を擧げて北支中央化に進出し來りつゝあつたのである。

かくて滿洲事件以來日本が北支に求めた特殊的地位も、滔々たる中央化の勢の前に一步一步後退を餘儀なくされ、今年の春には冀東解消冀察中央化も既に時日の問題とされ、日本が幾度か提唱せる國交調整の呼び掛けも支那側からは却つて冷笑を以て酬ひらるゝ有樣であつたのである。南京政府が多年抗日を以て民衆を教育し、抗日を唯一の要具として國內を統一し來れる歷史を顧みれば、そして更に南京政府の背後勢力に思ひ及へば、到底我が日本と根本的に相容れぬものであり、今日の事態は遲かれ早かれ來るべきものが遂にきたと見るべきであらう。

○　○

目下皇軍は北支に中南支に着々と戰果を收め、一報至る每に我々國民は皇軍將士の奮戰に絕大の感謝と感激を覺えつゝ今度こそは日支問題の徹底的に解決さるゝ事を待望しつゝあるのであるが、此の際我々日本國民として特に強調したきことは、先に政府の聲明せられたる如く、又皇軍の日々の活動が夫を示せる如く、今回の事變は飽く迄南京政府を目標としてをるのであつて、決して支那民族を敵としてをるのでないことである。抗日政權南京政府を敵とする丈であつて支那一般大衆とは東亞の二大民族として飽く迄互惠親善、共存共榮を實現し、東洋平和の大義を確立せんとする念願は依然として變りないのである。寧ろ熱烈にこの理想を要望すればこそ、その親善提携を阻害せんとする努力に對し反省を求めんとするに外ならぬのであつて、所謂大慈悲の利劍を揮つてゐるのである。

北支に於て熟々感じた事は排日侮日と稱され乍らこの排日侮日の中心は南京政府系政客其の他一聯の機關と學生並に軍隊に過ぎぬのであつて、大多數の支那民衆の理想は數十年來依然として安居樂業であり決して排日侮日ではない。そして日本民族との眞の親善提携は決して困難ではない。それは一に今後の日本の態度如何によるのであつて接するに道を以てし、過するに德を以てすれば、必ずや我々日本國民の冀求するが如き理想を實現し得ると信ずるのである。此の點について我々も過去の我對支政策なり國民としての態度につき深く省みて、眞に謙虛に又誠實に兩民族の心から提携を築くべきであり、又支那側にも一般支那大衆の心からなる願望を汲んで、民衆の爲、身を挺して、局に當る有爲な人材の發出を心から待望せざるを得ない。

○　○

最後に我々は今回の事件に關し特に注目すべきは、南京政府の背後に巨大なる勢力の存在することである。南京政府丈の問題とすれば其の解決は案外簡單であるかもしれない。然し其の背後勢力の特にコミンテルンの勢力に思ひ及ぶ時、事件の性質は容易ならぬものであり、その重要性は決して滿洲事件の比でないのである。事件勃發以來我々は人民戰線派の巨頭章乃器、沈鈞儒等の釋放、共產黨領袖陳獨秀の釋放、毛澤東、朱德等共產軍の活動、ソ支不可侵條約更に軍事密約等を眼前に見せつけられてゐるのである。そしてこれらの事實は何を物語つてをるか極めて明瞭である。

今回の事件が勃發するや國を擧げて奮然として立ち皇軍將兵の勇戰は固より、銃後の守りは國の端々に至る迄眞に涙ぐましきものがあり、國を擧げての緊張は亦滿洲事件の比でないのである。今回の事件の重大性は此の國民の緊張結果が明瞭に示してをるのであつて、民族の防衞本能は端的に事件の本質重大性を直覺して奮ひ立つてをるのであるまいか。皇軍將士の健鬪によつて支那に於ける軍事行動は長期に亘らず終了するであらう。又せしめねばならぬ。しかし事態はそれで一段落でないのであつて、いはゞ今回の事件は其の序の口に過ぎないのである。

これが今日重大なる時局に直面してをるといふ所以であつて、我々は大膽に卒直に此の事實を直視しなければならぬ。

更に國內的に考へてみても、昭和御維新の事業もまた前途遼く事態の推移と共に益々其の急速なる解決を要望せらるゝであらうし、全く文字通り國內外をあげての非常時に直面しつゝあるのであつて、我々國民として異常の決意を要すのである。この決意があつて始めて、此の難局を克服し得るのである。我々の兩親先祖等は明治二十七、八年戰後十年間臥薪嘗膽をして社稷を守り、今日の飛躍の礎石を築いた。我々もこの重大時機に處してこの先人の覺悟にならひ分に應じ立場に隨ひ、あらゆる犧牲を覺悟してかゝるべきであると信ずるのである。

銃後の護り如何

藤澤朝世（協調會總務部）

昔て我等の祖先は、漢字を通じて漢學を修め、遂に支那文華の精髓を攝取した。現代人は英語は習ふが殆ど漢學は修めず、徒らに英國文化の形骸を模倣して恥ずる所がない。

○

斯くて英語の教授は頗る盛んではあるが、一向に英國人の本領も、英國文化の特質も我が藥籠中のものとは爲し得ない。剩へ漢字を排し漢學を疎んずる今日に於ては、遂に支那精神も支那文物も之を良解するに苦しむ狀態となつた。

これでは英國が支那に有つ野望を挫かんとするにも、將又日支提携の實を擧げんとするにも中々容易の業ではない。

○

彼を知り我を知つて然る後百戰百勝するの理は、獨り兵家の理法のみではない。推して凡百の人に通ずる理法である。

○

支那膺懲の義憤は宜しい。更に心を濃かにして支那の實體を把握する努力は今後一層眞劍に爲されねばならぬ。彼を知ること淺くして、我が尺度を以て彼を律せんとすれば反つて抗日侮日を募らせるのみ。膺懲は飽迄皇化の爲の止むを得ざる一方策に過ぎぬ。

○

銃後の護りに任ずる我等は、戰線に在る我が將兵の勞苦を偲び、且又後顧の憂を無くさすのみでは十分でない。進んでは戰後に於て支那民衆を我に服從せしめ得て初めて完きを得たものと思ふ。

○

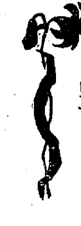
之を實現するには少くとも近功を求めず、射利を事とせず、眞實彼等が爲の安寧幸福を念とし、彼の怨まざることを圖らねばならぬ。即ち利を追はずして仁義を行ふのである。

○

それさへも暴戾なる支那では行はれないと斷ずるのは早計に失する。孔子は、言忠信にして行篤敬ならば蠻貊の國と雖も行はれんと喝破した。

○

大事を爲さんには小行をも愼しみ堅忍持久以て此の天業の恢弘を翼贊し奉らねばならぬ。



望ましき態度

勝間田清一

はかなき運命論

一つの最も平凡な人生觀に、社會は循環するものだと信じてゐるものがある。而もこの樣な考へ方は不景氣に見舞はれた時、悲境に沈んだ時に兎角多い樣である。かつて昭和五年頃の未曾有の不況時代に『こんな時世も永くは續くまい』『今度景氣が出たら』と云ふ樣な一聯の安價な希望を抱いたものが如何に多かつた事か。尤も斯る連中は多くの場合、一旦好景氣が來たり好運が舞込んだりすると、それは最後の懸岩に衝突する迄『この時世は續くものだ』と勝手な結論を心の何處かに持ちたがるものである。

こうした一見運命論にも近い樂觀論とは少し趣を異にするが、社會は再び昔に歸るものだ。或は昔に歸る事が理想であると心から考へてゐるものがある。多くの復古主義がそれである。この考へ方の中には『死んだ子供の年を數へる』にも似た一沫の感傷がある。この考へは又一つの理想主義とも關聯を有してゐる。理想主義者は社會の姿を一生懸命で頭で考へる。理想の社會は何かと求めに求める。それは忠實な自然科學者の樣に苦心慘膽する。理想の社會を漸く求めた。それに色ぬりをした、出來て見たら風呂場に往往見る一片のペンキ畫に過ぎなかつた。獨斷と矛盾が諸所に發見される。或る者は理想の國を求めて發狂した。

吾等はこれ等の人々を笑つてはいけない。彼等は眞劍なのだから。

空想と眞理と現實

こゝで今更乍ら思ひ出す事はエンゲルスのフォイエルバッハ論中の一節である。

『眞理は認識そのものゝ過程の中に、科學の長い歷史的發展の中に存するものであつて、この科學は低い階段の認識から絕えず高い階段へと進むものではあるが、たとひどんな點迄進んでも、謂はゆる絕對眞理なるものを發見して、その後はこの絕對眞理を眺めて手を拱いてをればよいと云ふ樣な點には到達するものではない』暗夜に星を求める樣な眞理があるものではない。社會もそうだ。『歷史もまた認識の場合と同じく、人類の完全な理想狀態のうちに完結點を見出すことは出來ぬ。完全な社會、完全な『國家』とはたゞ空想の中にのみ存立し得るものである。これに反して、つぎからつぎへと續く一切の歷史的狀態は低きより高きへと向上する人間社會の無限の發展の道程における一時的階段にすぎぬ』

心構へ

こうした低きより高きに向上する人間社會に於て我等の採るべき態度は如何。先づ以て、明日の『開運』を信ずる循環的社會觀を捨てねばならない。不景氣は何時迄も續くものではない、やがては好景氣も到來する。運あれば不運ありてふ主義は今では完全に行詰つた。こうした連中が最後にデッドロックに突き當ると一も二もなくルンペンか狂人となる、如何に多くのルンペンが公園や路傍は勿論ダンスホールやカフエーに充滿してゐる事よ。昨年の冬着が今年は間に合はなかつた。今更驚く必要はない。彼の身體は生長してゐたのだ。社會に於ても冬去りて春來り、春去りて夏來る。だが社會は常に生長してゐる。

しかりと云ふて自分自身が勝手に眞理や理想を造りあげて、山頂に立ち、民衆に向つて『來い〳〵』とさしまねく樣な人間にはなり度くない。ツアラストウラは眞理を求めて山頂に登つた。深山に至つて幾多の仙人を見た。だが彼は山頂から下界を眺めて始めて悟つた。『大衆が戀しい』と。彼は狂人の如く下山した。これにも似た超現實主義者が未だに大衆の戀しさも悟らず、吾れこそは社會の指導者なりとしてゐる。社會と共に步み、社會と共に苦しみ、大衆と共に生き、大衆と共に苦しむその過程に於て眞理を發見する事が出來ることをこれ等の人は知らないのだ。

現代人の使命

現實の日本は未曾有の國難に當面してゐる。日支事變の結果の如何は日本の運命を左右するだらう。國內の經濟事情は只單に國際收支や爲替關係だけについて見ても憂ふべき問題が山積してゐる。一般國民生活は都市に於ても農村に於ても行詰つてゐる。この未曾有の非常時に我我は安價な運命論や循環的社會觀に迷つてゐる事を許されない。徒に現實を無視した理想論に依つて社會を導かんとしてもそれは單なる自己陶醉に終るであらう。日本をよりよき日本を生ましめん爲に、その段階にこの社會が到達してゐる事を認識して、具體的な積極的な努力がなされてこそ眞理も理想も把握出來る。日本は正によりよき日本たらん爲に生みの惱みを續けてゐる。その段階が現實である。末梢的な議論や、低級な對策がこの社會を救ふものとは考へられない。現狀維持派や傍觀主義者はこの段階の日本には許されないであらう。理想主義者は理想に忠實であればある程落膽するであらう。社會は具體的事實として日々進展する。その步みと共に最も具體的に最も科學的に積極的努力して行く所に望ましき態度がある。更によりよき日本の爲に。

勝間田先生は企畫廳調査官で農村問題の專攻。本文の見出しは編輯子の附加したもの。

勞務管理講習會の感想を述ぶ

秩父町關野工場　佐藤敏彦

今夏八月三、四、五日に於ける工民道場に行はれた講習會こそ吾等實務に居る所の者の最も必要なる要素であると思ひます。

全く言は易けれ共實際に當つた場合はそう簡單に物事を運んで行く事は出來ないものです。今日社會の狀態を見るなれば、やゝもすれば、個人主義的思想に走らんとして居ります。

かゝる時に當りまして今回の講習會こそ實に有益に且つ自己の修養になりました事は、これ皆諸先生方の御熱心なる御講義の賜と深く感謝致して居るものであります。

人間社會は御教訓の如く團體の幸福といふ事を第一に置き、大いに精神を修養致したいと考へて居ります。

此の度私も一講習生として御講義を拜聽出來ました事は誠に幸甚の至りと思ひます。

かの講習は短日ではありましたが團體生活の根本であるお互ひの精神がぴつたりと結合し寢食も共にし愉快にすごしました事は今なほ眼に映じ懷かしく感ずるのであります。

この團體精神を以て事に當らば必ずや勞資の協調は實行出來るものと信じます。私はこの力強き講習によりて更生の第一步道を進み諸先生方の御教訓を守り專心國家產業のため微力ながらも盡し、又工場精神の修養に努力致すつもりで居ります。終りに當りまして諸先生方の御健在であらせられる樣心より御祈り申上げる次第であります。